

不登校生徒の居場所感と時間的展望

—不登校特例校に在籍する中高生 6 事例の検討—

21003FRM 北村 春花

キーワード：不登校・居場所感・時間的展望

I. 問題と目的

1. 不登校生徒の社会参加

長期化する不登校の引きこもりやニートへの移行が問題となっている現代において、文部科学省は、不登校支援の目標を、学校に登校することではなく、将来的に精神的、経済的に自立することを目指す社会的な自立の支援が必要であることを提言している（文部科学省，2016）。思春期の不登校生徒の状態像として、集団に帰属できない孤立感、混乱と、社会参加への強い不安があり、それが将来を閉ざすことにつながる。過去に捉われず、先にある未来の展望をイメージできることが、社会参加に向けた課題となる。

2. 不登校生徒の時間的展望

過去の受容や将来イメージを把握する概念として、「時間的展望」がある。時間的展望とは、“ある一定の時点における個人の心理的過去及び未来についての見解の総体”（Lewin, 1951）と定義されている。中学生の適応的な時間的展望は、現実に沿った内容の想起が課題となる。不登校生徒の時間的展望においては、時間的な体験が希薄な状態から、過去・現在・未来が現実性をもって体験されることが課題となる。時間的展望の投映法を用いた測定について、佐藤・岡本（2010）は、過去から未来までを物語る過程から、展望の繋がりを把握することができるとして、主題統覚検査（TAT）の有用性を示した。

3. 不登校生徒の居場所感

孤立感を抱く不登校生徒の当事者の語りにおいて、居場所の獲得が、未来展望が開かれる契機となったことが語られている。不登校特例校等、不登校支援の場での居場所感を得ることが、時間的展望の獲得につながると考えられる。また、学校での生徒の体験を把握する投映法として、動的学校画（以下、KSD）がある。KSD は、学校で

の対人関係や学校生活への態度、自己認識を推測できるため（田中，2009）、無意識的領域から居場所感を理解することができると考えられる。

4. 本研究の目的

本研究では、不登校を体験し、現在不登校特例校に通う生徒の居場所感と時間的展望の関連を、質問紙法に加え、投映法を用いた無意識的領域からの理解を含め、検討することを目的とする。

II. 方法

1. 調査協力者

不登校特例校 S 学園に所属する中学 3 年生男子 2 名、女子 3 名、高校 3 年生男子 1 名である。

2. 調査内容

居場所感尺度（「安心感」「受容的環境」「連帯感」「役割」と時間的展望体験尺度（過去：「過去受容」、現在：「現在の充実感」、未来：「希望」「目標指向性」）についての質問紙と、心理検査である KSD、TAT を実施した。

III. 結果と考察

1. 居場所感と時間的展望体験の関連

中学 3 年生 5 名の居場所感尺度と時間的展望体験尺度の下位尺度間に Spearman の順位相関係数を行ったところ、「受容的環境」と「目標指向性」に強い正の相関 ($r = .947, p < .05$)、「受容的環境」と「希望」に強い正の相関 ($r = .895, p < .05$)、「役割」と「目標指向性」に強い正の相関 ($r = .895, p < .05$)、「役割」と「希望」に強い正の相関 ($r = .947, p < .05$) が見られた。“自分が受け入れられていると思えること”、“集団の中に自分の役割があること”が、“現在の自分と関連付けて具体的な目標を立てること”と“未来の未知なるものに対する自信”との間に関連が示唆された。

2. 居場所感高群の時間的展望

居場所感高群の A さん、C さんの KSD は、授業場面であり、自己像は顔のパーツが眼のみ、友人同士の関わりが描かれず、活動性、情緒性の低い描画である。意識的に居場所感を得ているものの、受験や自己意識の不安といった中学3年生の発達に適した不安感を抱いていると推測する。時間的展望体験尺度において、共に未来展望の得点が高いが、TAT の反応は異なる。A さんは、過去からの努力が実を結ぶ物語や、未来への不安と期待を感じている物語が特徴的であった。一方、C さんは「過去受容」の得点が高かったものの、過去に固着したネガティブな物語が語られ、それ以降の図版では、ネガティブな情動を投射する不安や抵抗感からか、未来の展望が語られなかった。A さんは過去を受容しつつあり、未来を具体的に想起する段階である。C さんは過去を受け入れようとしているが困難であり、未来の展望を明確に想像することができない段階であると推測する。

3. 居場所感低群の時間的展望

居場所感低群において、B さん、D さんの KSD は、休み時間の友人とのポジティブな場面設定であるが、人物像同士の関わり合いが描画には現れず、描画の統合性に欠ける抑うつ感の高い描画であった。時間的展望体験尺度は、B さんは「希望」が高く、D くんは、過去・現在・未来の全ての下位尺度得点が低かった。TAT においては、2 名とも物語を想像する困難さがあったため、時間的展望の長さや現実性を分析することができなかった。居場所感低群の反応について、①葛藤を抱えることの困難さ、②三者関係を処理することの困難さが挙げられ、自我機能の弱さが示された。図版の刺激に反応することができなかった B さんは、図版の刺激と自身の知覚や空想を統合することが難しく、現実検討の課題がある可能性があると推測した。“過去の嫌な思い出”と反応した D くんは、現実検討はできているが、過去に強く固着しているために、葛藤を持つ場面や、対人関係における場面で、自身の情動が刺激されることに耐えられない弱さがあり、意識化することを避けたと推測する。

4. 居場所感低群の高校生の時間的展望

居場所感低群の高校生 F くんは KSD において友人像が描かれなかった。時間的展望は、「希望」の値が高く、TAT では、不安が語られつつも、つながりに欠ける明るい未来展望が語られる図版があった。居場所感の基盤がない F くんは高校生特有の現実味を帯びてきた未来への不安がありつつ、自信でそれを覆い隠すために、一貫性に欠けるポジティブな未来が想起されやすい傾向が見られたと考えられる。

5. ASD 群の時間的展望

ASD の診断があり、居場所感高群であった E さんの KSD では、友人、先生と楽しむ場面が描かれた。TAT では、情緒性に乏しく、コマ送りのような短い物語であった。ASD の特性である、気持ちを読み取る困難さ、状況を全体的に把握し、処理する困難さによって、つながりのある過去や未来の想像の難しさがあったと推測する。

IV. 総合考察と今後の課題

居場所感と時間的展望体験の間に関連が見られたことは、データ数が少なく信頼性が十分とは言えないものの、不登校支援の場における居場所の提供が生徒の未来展望の広がりを受けている可能性が示された。不登校支援の場に身を置く生徒は、年齢とともに受験、進路選択等で未来への意識的な展望は持たざるを得ないと考えられるが、安心感を得られない生徒、過去の傷つきを受け止めたいが受け入れられないといった困難のある生徒は、繋がりのない明るい未来を抱くなど現実的な未来展望をもつことが難しいだろう。支援について、安心感を得られる居場所の獲得と、不登校生徒の過去を受け止める体験が大きな課題となると考えられる。各生徒に応じて、大人との信頼関係の獲得の必要性や、過去を受け入れる際の情緒的な刺激に対しての支援体制や理解が必要であると考えられる。生徒の TAT の語りからは生徒の過去の傷つき体験が直接的に表出された。侵襲性に十分配慮しながら、生徒の語りを活かした理解と支援への取り組みを考え続けていきたい。